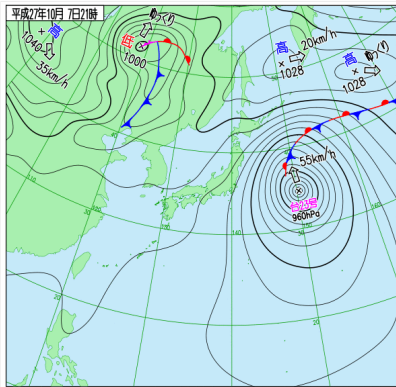


おなじみの天気図がカラーへ！ 気象庁132年の歴史に大変革

◎ 2015年12月05日 09時56分



9日から運用が始まるカラー天気図(提供: 気象庁)

記録的な大雨による水害や台風被害が相次ぐ近年、気象予測の重要性や関心は年々高くなる一方だ。日本で気象観測が始まった明治時代半ばから約130年、お馴染みの「天気図」が、今月9日、従来の白黒スタイルからカラーへ様変わりする。

気圧の配置や前線の動きを表す天気図は2種類ある。気象庁が3時間ごとに行う気象観測にもとづいて1日7回発表する「実況天気図」と、24・48時間後の動きを示した「予想天気図」だ。

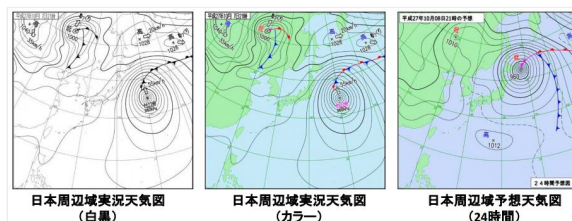
気象庁は、東京气象台時代の1883(明治16)年2月16日(天気図記念日)、全国11カ所の測候所から電報で集めたデータをもとに、日本で初めての天気図を作った。これはドイツ人気象学者の指導を受けて、手書きで地図の上書き込まれたもので、当時としては7色刷りの画期的なものだったという。

3月1日からは1日1回天気図を印刷し、電信による配布を開始。今のように多くの国民が天気図に親しむようになったのは、それから41年後の大正時代、1924年8月に国民新聞に天気図が掲載されるようになってからだ。

以来、気象衛星や観測技術の向上によって、進化を続けた天気図は、基本的には等圧線や前線で構成するお馴染みのスタイル。しかし、気候変動の影響で気象災害が相次ぐなか、防災機関や船舶関係者だけでなく、一般の国民も天気図に親しむ機会が増え、天気図のカラー化を望む声が増えてきた。

これを受けて気象庁は、今月9日午前11時から、ホームページで公開する実況・予想天気図をカラー版でも提供することにした。新しい天気図では低気圧からのびる温暖前線が赤、寒冷前線が青で色分けされるため、視認性や利便性が高まるという。

また、アジア太平洋域の広い範囲をカバーする天気図についても同時にカラー化され、過去3日分をさかのぼって閲覧するサービスも始まる。



日本周辺域実況天気図
(白黒)

日本周辺域実況天気図
(カラー)

日本周辺域予想天気図
(24時間)

左が現在の実況天気図。右2点がカラー化された実況・予想天気図。実況天気図は1日7回、予想天気図は2回発表される(提供: 気象庁)